岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repositry

Title	岐阜県の市町村史におけるカワウソの分布
Author(s)	向井, 貴彦
Citation	[岐阜大学地域科学部研究報告] vol.[42] p.[15]-[25]
Issue Date	2018
Rights	
Version	岐阜大学地域科学部 / ぎふ哺乳動物研究会
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/74515

※この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

岐阜大学地域科学部研究報告第 42 号： 15 - 25（2018）

岐阜県の市町村史におけるカワウソの分布

向　井　貴　彦，梶　浦　敬　一

（2017 年 11 月 30 日受理）

A bibliographic survey of the distribution of the river otter *Lutra lutra* in Gifu Prefecture, Japan

Takahiko MUKAI and Keiichi KAJIURA

要約

岐阜県内の市町村史および書籍におけるカワウソについての記述を検討し，岐阜県におけるカワウソの分布と絶滅の過程について考察した。岐阜県の 103 の市町村史（合併以前の旧市町村）を調査した結果，20 の市町村史からカワウソについての記述が見つかった。また岐阜県内の自然についての 4 冊の本の記述を合わせると，24 の市町村にカワウソが分布していた可能性が示された。カワウソの記述があるのは山間部の市町村のみであり，平野部の市町村史にはカワウソの記述は見られなかった。カワウソについての具体的な記述は 12 の市町村史に見られたが，その多くは明治時代にカワウソが姿を消したとするものであり，大正時代以降にカワウソがいたとするものは５市町村のみだった。岐阜県内のカワウソは昭和初期に絶滅したとされているが，明治時代の狩猟によってカワウソの個体群が回復困難になるまで減少し，その後の約 20 年間は散発的に捕獲・目撃されたものの，個体数が回復することなく絶滅したと考えられた。

Abstract

We surveyed bibliographic records of the river otter (*Lutra lutra*) in Gifu Prefecture, Japan. Of 103 books concerning the history of municipalities of the prefecture, only 20 books included records of the river otter. Four books about the natural history of the prefecture included additional information of the river otter. These records suggest that the distribution of *L. lutra* had spread to 24 municipalities in the mountainous area of Gifu Prefecture but had become extirpated in much of the area during the Meiji period (1868–1912). Some records indicate that the river otter survived until the early Showa period (the 1930s). These bibliographic records suggest that the overhunting of *L. lutra* in the Meiji period might have irreversibly damaged the river otter population.

はじめに

カワウソは水辺の生活に適応した大型のイタチ科の動物であり，後述の長崎県対馬を除くと，日本列島ではすでに絶滅したとされている（安藤　2008 ; 佐々木　2016）。分類学的には本州・四国産のカワウソが独立種ニホンカワウソ *Lutra nippon* として記載されており（Imaizumi and Yoshiyuki 1989），ユーラシア大陸と北海道のカワウソは別種のユーラシアカワウソ *Lutra lutra* とされている（安藤　2008）。ただし，環境省のレッドリスト（ http://www.env.go.jp/press/files/jp/105449.pdf 2017 年 11 月 17 日閲覧）では日本産カワウソが「ニホンカワウソ（本州以南亜種） *Lutra lutra nippon*」と「ニホンカワウソ（北海道亜種）*Lutra lutra whiteleyi*」として掲載されており，和名や学名には多少の混乱がある。

和名についての混乱だけでなく，日本列島に分布していたカワウソの実態についても不明な点が多い。「ニホンカワウソ」の形態的特徴についての研究は愛媛県と高知県のわずかな標本に依存しており（Imaizumi and Yoshiyuki 1989 ; Endo et al. 2000），本州や九州に広く生息していたカワウソがニホンカワウソだったという明確な証拠はない。毛皮等を用いた DNA 解析においても愛媛県と高知県のカワウソのミトコンドリア DNA は大陸産のユーラシアカワウソとは異なっていたものの，神奈川県三浦市城ケ島で 1915 年もしくは 1916 年に捕獲されたカワウソのミトコンドリア DNA はユーラシアカワウソと同じ系統だった（Waku et al. 2016）。さらに，2017 年には長崎県対馬においてカワウソの生息が確認され，糞のミトコンドリア DNA 解析によってユーラシアカワウソであることが確認されている（環境省報道発表資料 2017 年 10 月 12 日 http://www.env.go.jp/press/104655）。神奈川県三浦半島は明治時代にはすでに海外からの物流が盛んだった地域であり，城ケ島産は人為的移入の可能性も考えられるが，いずれにしても四国以外の地域に分布していたカワウソが「ニホンカワウソ」だったという明確な根拠はない。

また，日本産カワウソの絶滅に至る経緯についても，比較的詳しく記録されているのは 1950 年代以降の愛媛県と高知県のみである（高知新聞社　1997 ; 安藤　2008 ; 宮本 2015 ; 佐々木　2016）。それ以前にすでに日本列島のほとんどの地域からカワウソは姿を消しており，その理由については明治時代から昭和初期にかけての毛皮目的の狩猟によるものとして説明されている（今泉・高島　1974 ; 安藤　2008 ; 佐々木　2016）。毛皮用の乱獲については，明治時代にカワウソが最高級の毛皮獣として輸出されることで莫大な利益を生んでいたためとされている（河井　1997）。そのことを示す資料として，北海道や富山県の狩猟統計において明治時代にカワウソの捕獲数が急増した後に激減していることが示されている（安藤　2008）。また，カワウソは多くの餌を必要とするために元々個体数が少なかったにも関わらず，行動範囲が川沿いに限定されることで捕獲が容易だったために捕りつくされたと推測されている（三浦　2002）。

しかし，日本のカワウソは 1928 年に狩猟が禁止され，それ以後は公には狩猟が行われなくなった。その直前の 1920 年代の狩猟統計では，数が少なくなったとはいえ全国で捕獲されており，この時点では日本の広範囲に生き残っていたと考えられる（今泉・高島　1974）。ところが，その後の記録は非常に散発的なものとなり，1954 年に愛媛県肱川で捕獲されたのが「再発見」とされて保護活動や調査が開始される。以後 1970 年代まで四国西南部の愛媛県および高知県の沿岸を中心に捕獲や目撃がなされたが，ほとんど保護に結びつかずに絶滅に至ったとされている（佐々木　2016）。

四国西南部でのカワウソの絶滅までの過程は詳しく記録されているが（高知新聞社 1997；宮本　2015），1920 年代以降に全国でどのようにしてカワウソが絶滅していったのかについては，ほとんど何もわかっていない。岐阜県においても，かつてはカワウソが広く分布していたとされているものの（岐阜県哺乳動物調査研究会　1982），その実態についてはほとんど明らかになっていない。そこで，本研究では岐阜県内の市町村史におけるカワウソについての記述を検討し，県内での分布と絶滅についての考察を行った。

方法

本研究では，岐阜大学図書館，岐阜県図書館，岐阜市立中央図書館に所蔵されている岐阜県内の市町村史を参照し，カワウソについての記述の有無と，記述されている場合はその内容を記録した。馬瀬村史については，いずれの図書館にも収蔵されていなかったため，ガリ版刷りで残されていたものを著者（梶浦）が入手して内容を確認した。文献調査は 2015 年から 2016 年におこない，平成の大合併以前の 103 の市町村史について内容の確認を行った（付表 1-3）。各市町村史の出版年は，洞戸村史（1926 年）以外は 1950 年代以降である。

市町村史以外の文献資料として，「長良川の生物」（長良川の生物編集委員会，岐阜県，1957 年），「岐阜県の動物」（岐阜県高等学校生物教育研究会，大衆書房，1982 年），「岐阜　ふるさとと動物たち」（岐阜県哺乳動物調査研究会，岐阜日日新聞社，1982 年），「続　岐阜　ふるさとと動物たち」（岐阜県哺乳動物調査研究会，岐阜日日新聞社，1987 年）も参照し，カワウソについての記述を記録した。

なお，岐阜県に生息していたのがニホンカワウソ *Lutra lutra nippon*（もしくは *L. nippon*）であるかユーラシアカワウソ *L. lutra lutra* であるか明確でないため，佐々木（2016）および上田・安田（2016）と同様に，本研究の調査対象はカワウソ *Lutra lutra* としておく。

結果

調査対象とした岐阜県内の 103 の市町村史の中で，カワウソについての記述が 20 の市町村史から見つかった（図 1）。圏域別に見ると飛騨地方が 10 町村で最も多く，次いで中濃地方が 4 市町村，西濃地方と東濃地方が各 3 町村だった。カワウソについての記述は岐阜地方の 17 市町村史には見られなかった。また，カワウソについての記述が含まれていない 83 市町村史の多くは自然や動植物についての記述が全く無いものが多かった。県内の動物についての記録などをまとめた 4 つの文献にはカワウソの生息に関する具体的な記述が見つかった。それらの市町村史と文献に見られたカワウソに関する記述は次の通りである。

1. 市町村史（具体的な記述のあるもの）

12 の市町村史にはカワウソについての具体的な記述も含まれていた。それらの中で，昭和までカワウソがいたとされるものは 3 町村（七宗町，揖斐川町，清見村），大正までとされるものは 2 町村（明宝村，久々野町），明治までとするものが 5 市町村（可児市，付知町，福岡町，大八賀村，宮川村），年代に関する記述が無いのが 2 町村（白鳥町，加子母村）だった。以下に，それぞれの記述内容を抜粋する。

＜昭和までいたとされるもの＞

七宗町史（1993 年発行）

「アンケートによれば，カワウソは昭和二四，五年ごろまで確認されている」

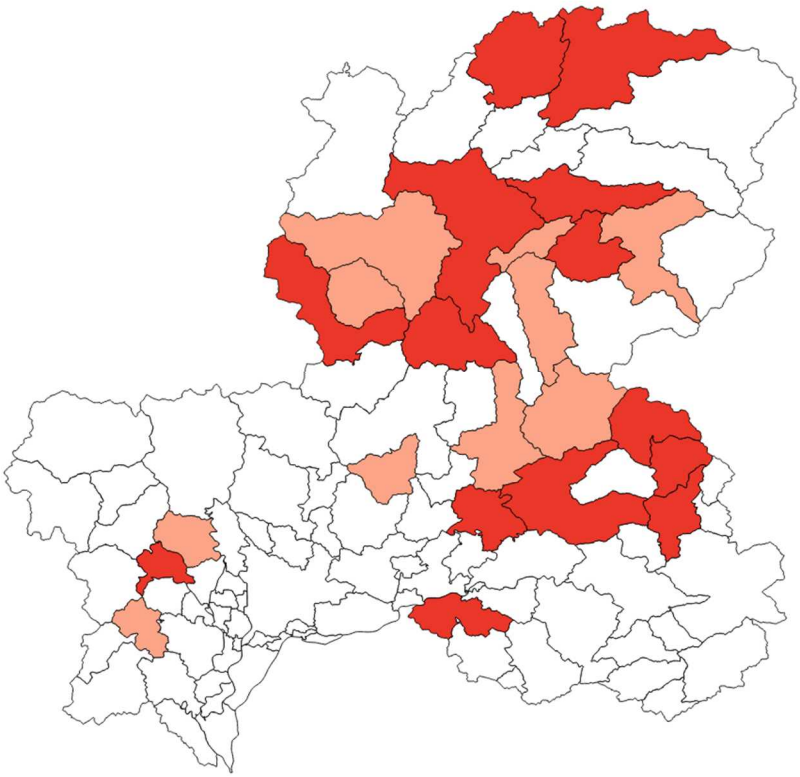

図 1. 市町村史および文献においてカワウソの生息についての記載の見られた市町村。濃色は具体的な記述のあった市町村。淡色は市町村に生息する動物名としてのみ記載されていた市町村。作図の都合で大八賀村（1955 年に高山市に編入）のカワウソの記録は旧高山市の記録として描画。地図は QGIS（http://www.qgis.org/ja/site/）で作図した。

揖斐川町史（1971 年発行）

「沼地に多かったカワウソは昭和初期に，それぞれ絶滅したといわれる」

清見村史（1976 年発行）

「川うそは昭和の初め頃森茂で捕えられたのが最後である」

＜大正までいたとされるもの＞

明宝村史（1993 年発行）

「大正の終わりごろのこと，父親が田んぼにコイを入れとって，夜さ水を止めに行ったら，何やら谷でシャビシャビしとった。ネコじゃと思ってひっつかまえたら腕に食いついたって。これがわしが見た最後のカワウソやったって話された」（角源造　明治四〇年生）

久々野町史（2010 年発行）

「大正 4 年に発刊した久々野村史に利用動物，在来種の主なるものの記述に次のようなものがある　（中略）　獺　毛皮細工用」

＜明治までいたとされるもの＞

可児市史（2007 年発行）

（明治 34 年の「岐阜県産業統計書」によるものとして）「川獺皮２枚」

付知町史（1974 年発行）

「カワウソは明治中頃まで見かけたと云う話し程度であり」

福岡町史（1981 年発行）
「なお明治以前に生棲していたものには，ホンシュウジカ・ニホンオオカミ・ニホンカワウソ（古名オソ）などがある」

大八賀村史（1971 年発行）
「いたちやてん，かわうそも明治時代までは居たが今日では絶滅の運命にある」

宮川村史（1981 年発行）
「明治八年六月『村地情景明細表』（坂下村）には，棲息する動物として，クマ・イノシシ・サル・カワウソなどをあげているので，明治のころまだこれらの動物がいたようである」

＜年代の記述無し＞
白鳥町史（1976 年発行）
「またカワウソ・ムササビなどは，かつては相当多く生息していたといわれているが」
「とくにカワウソやヤマイヌ（ニホンオオカミ？）がいたということは，今は昔語りとなっている」

加子母村史（1972 年発行）
「カワウソ・イタチは水辺の石垣の穴などに巣を作って棲み，カワウソの良質の毛皮と，イタチの追われた時に放つ悪臭とはよく知られているが，共に池の鯉にとっては大敵である」

2．市町村史（具体的な記述のないもの）
8 町村（垂井町，谷汲村，下呂町，萩原町，金山町，朝日村，荘川村，宮村）については，町村史の中で動物名として挙げられているだけであり具体的な記述は見られなかった。ただし，宮村史（2004 年）には宮村内での状況ではないものの，飛騨地域でのカワウソの絶滅に関する考察が記されていたので，記述内容を以下に抜粋する。

「本州から絶滅したとされる獺の毛皮等の統計が『岐阜県産業統計書』の獣皮及鳥獣毛調査表に記載されている。この記載は地域に見られなくなった哺乳類についての生息を知る手がかりになる。明治 34 年，岐阜県全体で川獺の毛皮 29 枚，明治 35 年 68 枚挙がっており，大野郡・吉城郡・益田郡での産出量が多い。大正 3 年の行政文書「宮村村誌」には獺の記録はない。こうした記録から，獺がいなくなったのは明治の終わり頃とするのが妥当であろう。『清見村誌』による「昭和の初め森茂で捕られたのが最後」ということからも推測できる」

また，白川村史（1968 年）にカワウソについての記述は無く，新編白川村史（1998 年）においてもカワウソの分布や村内での生息についての具体的記述は無かったものの，カワウソの毛皮がフイゴに用いられていたことが記されていた。カワウソの毛皮利用についての記述は次のとおりである。

「今回の調査で聞き取りを実施した際に，カワウソについて興味深い話を聞くことができた。カワウソの毛皮は柔らかくスポンジ状であるため，鍛冶屋が炉に風を送る「フイゴ」の内部にカワウソの毛皮を使用したとのことで，板谷克雪に民俗展示館の「フイゴ」を調査した。なるほど，吹き皮が転じたとされる「フイゴ」にはすべて皮が使用されていたが，カワウソを使用したというものには毛皮がほとんど残っていなかった。ほかにイタチ，カモシカの毛皮が使用されていたものもあった。」

3．その他の文献
市町村史以外に調査した４つの文献には，粥川（旧美並村），蛭ヶ野高原・高鷲（旧高鷲

町），高原川（旧神岡町），白川（白川町），揖斐川町に生息していたとする記述が見られた。その中の，高原川と白川は大正，揖斐川町は昭和 7 年までカワウソがいたとされる。以下に，それぞれの文献からの抜粋を示す。

長良川の生物（1957 年発行）

「粥川といえば鰻の名所であるが（中略）かつてはカワウソなどもこの附近に相当いたらしい」（p147）

「蛭ヶ野高原・高鷲付近」（p153 の表）

岐阜県の動物（1974 年発行）

「ニホンカワウソも高原川沿いでは，大正 10 年頃までトラ挟みを使ってよく捕獲されていたようである」（p36-37）

岐阜　ふるさとと動物たち（1982 年発行）

「この二例の目撃はいずれも白川の支流，赤河の上流部においてであった。同所においては大正初年まで足跡が見られたという。」（p68-69）

続　岐阜　ふるさとと動物たち（1987 年発行）

「県下では昭和七年に揖斐川町北方二区の池で捕ったものを最後に標本を得られていない」（p28-29）。

考察

岐阜県内の 103 の市町村史および岐阜県内の動物についての 4 つの文献を調査した結果，24 市町村にカワウソが分布していたとする記述が得られた（図 1）。その多くは飛騨地方などの山間部であり，岐阜地方などの平野部の市町村史に記述が見られないのは，少なくとも近代以降の岐阜県ではカワウソが山間部の河川にのみ生息していたことを示唆している。しかし，濃尾平野のような環境が元々カワウソの生息に適していなかったのか，あるいは古くから水田が開拓されて人口が多かったことで，江戸時代以前にすでにカワウソが姿を消していたのかは不明である。

市町村史の記述からは，岐阜県においてもカワウソが毛皮目的で狩猟されていたことが明らかである。宮村史（2004 年）で述べられているように，明治時代の産業統計書には多くのカワウソの毛皮が産出していたことが記されている。しかし，大正以降にカワウソがいたとする市町村史は多くない（図 2）。これは，明治時代に日本全体でカワウソの乱獲が行われたことが絶滅の大きな要因とする推測（安藤　2008；佐々木　2016）と一致しており，岐阜県内でも狩猟によってカワウソの生息数が著しく減少したものと考えられる。ただし，1923（大正 12）年から 1927（昭和 2）年の農林省の狩猟統計では，大正 12 年と大正 14 年に岐阜県で 2 頭ずつの捕獲記録があり（今泉・高島　1974；佐々木　2016），カワウソが激減したとはいえ狩猟対象として捕獲されていたことが明らかである。「岐阜県の動物」（1974 年）においても高原川（旧神岡町）で大正 10 年頃までよく捕獲されていたと記述されている。

全国的なカワウソの減少によって，1928（昭和 3）年には全国でカワウソの狩猟が禁止されているが（佐々木　2016），「続　岐阜　ふるさとと動物たち」には「他県で狩猟対象にできたのは昭和 2 年まで」と書かれており，昭和 7 年に揖斐川町で捕獲されたのが県内の最後の標本とされている。揖斐川町史でカワウソが昭和初期に絶滅としているのは，おそらくこの標本の記録をもとにしていると考えられる。また，清見村史では「昭和の初め森茂で捕られたのが最後」とされている。実際には密猟によってカワウソの狩猟が続いていた可能性もあるが，目撃したという談話でさえ昭和になってからのものはほとんどない。

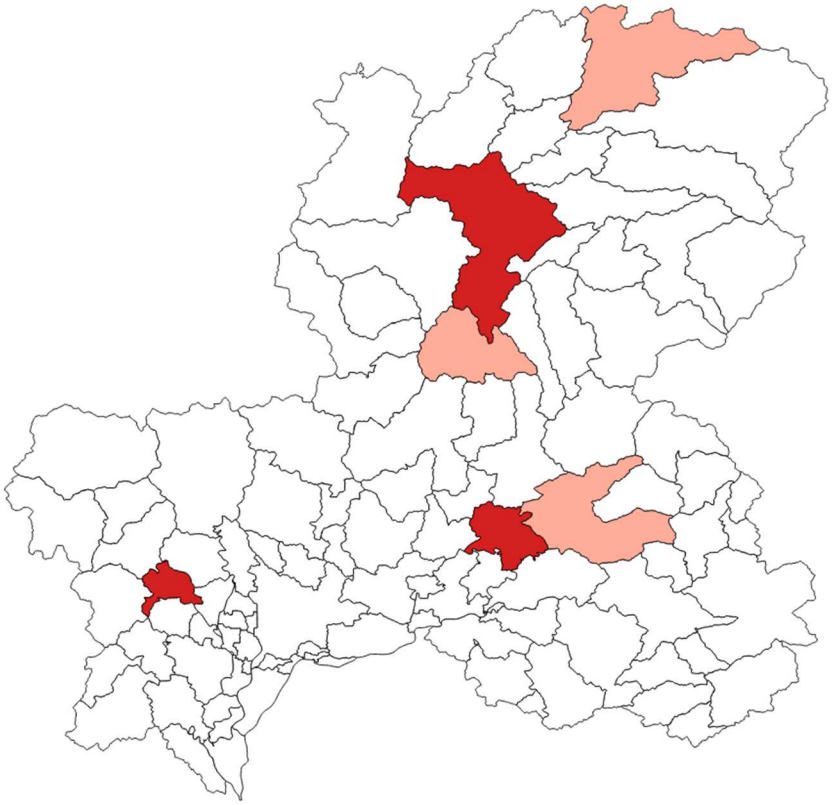

図 2. 大正以降にカワウソの生息があったとされる町村。濃色は昭和まで見られたとする町村。淡色は大正まで見られたとする町村。地図は QGIS（http://www.qgis.org/ja/site/）で作図した。

七宗町史のみが昭和 20 年代までカワウソがいた可能性を記述しているが，これはあくまでもアンケートによるものであり他の動物の誤認の可能性もあるため，岐阜県においても昭和初期に絶滅したものと考えられる。

昭和初期に岐阜県内のカワウソが絶滅した要因については不明だが，明治時代の乱獲によって個体群を維持できないほど減少していた可能性が考えられる。四国西南部の場合は 1950 年代後半からカワウソの保護活動や調査が開始され，特別天然記念物に指定されたにも関わらず，1979 年に撮影された個体を最後に絶滅している（高知新聞社　1997；宮本 2015：佐々木　2016）。このことは，カワウソの個体群が回復困難なほど小規模になってしまうと，そこから数十年間は目撃が続いたとしても，最終的には絶滅してしまうことを示している。四国西南部では 1950 年代の生息確認から最後の目撃まで約 30 年が経過しているが，岐阜県においても明治時代末に個体群が末期的な状態に陥っていたとすれば，散発的な目撃や捕獲が続きながら，約 20 年後の昭和 7 年の記録を最後に絶滅したというのは十分に考えられる。明治から昭和初期にかけて岐阜県の山林や河川に大きな変化があったことも考えられるが，岐阜県内におけるカワウソの絶滅は明治時代の乱獲に起因するものと考えるのが合理的だと思われる。

謝辞

本研究における文献調査については岐阜大学地域科学部向井ゼミの奥村俊紀，野田千奈，山田千晴の各氏の協力によるものであり，特

に山田千晴氏には市町村史の内容確認について多くの労力を割いていただいた。ここに感謝の意を表する。

引用文献

※市町村史については付表参照

安藤元一．2008．ニホンカワウソ　絶滅に学ぶ保全生物学．東京大学出版会，東京．233pp.

Endo, H., X. Ye and H. Kogiku. 2000. Osteometrical study of the Japanese otter (*Lutra nippon*) from Ehime and Kochi Prefectures. Mem. Natn. Sci. Mus., Tokyo, 33: 195-201.

岐阜県哺乳動物調査研究会．1982．岐阜　ふるさとと動物たち．岐阜日日新聞社，岐阜市．196pp.

岐阜県哺乳動物調査研究会．1987．続　岐阜ふるさとと動物たち．岐阜日日新聞社，岐阜市．382pp.

岐阜県高等学校生物教育研究会．1982．岐阜県の動物．大衆書房，岐阜市．404pp.

今泉吉晴・高島幸男．1974．ニホンカワウソの衰退を辿る　―主に四国のカワウソについて―．生物科学，26: 24-29.

Imaizumi, Y. and M. Yoshiyuki. 1989. Taxonomic status of the Japanese otter (Carnivora, Mustelidae), with a description of a new species. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser.A, 15: 177-188.

河井大輔．1997．毛皮を狙われた水獣たち．FRONT，9: 26-27.［1997 年 8 月号（第 9 巻 11 号）］

高知新聞社．1997．ニホンカワウソやーい！　高知のカワウソ読本　―四国全域に幻の姿を追う―．高知新聞社，高知市．287pp.

三浦慎吾．2002．日本は野生動物とどのように向き合ってきたか．科学，72:95-101.［2002 年 1 月号（第 72 巻 1 号）］

宮本春樹．2015．ニホンカワウソの記録　最後の生息地　四国西南より．創風社出版，松山市．212pp.

長良川の生物編集委員会．1957．長良川の生物，岐阜県．415pp.

佐々木浩．2016．日本のカワウソはなぜ絶滅したのか．人間文化研究所年報，27: 95-111.

上田浩一・安田雅俊．2016．五島列島におけるカワウソの分布と絶滅．哺乳類科学，56: 151-157.

Waku, D., T. Segawa, T. Yonezawa, A. Akiyoshi, T. Ishige, M. Ueda, H. Ogawa, H. Sasaki, M. Ando, N. Kohno and T. Sasaki. 2016. Evaluating the phylogenetic status of the extinct Japanese otter on the basis of mitochondrial genome analysis. PLoS ONE, 11(3): e0149341. doi:10.1371 / journal.pone. 0149341.

付表 1．本研究で調査した市町村史（岐阜・西濃地方）.

圏域	現市町村	旧市町村	カワウソの記述	発行年月日
岐阜	岐阜市	岐阜市	×	1980/3/31
岐阜	岐阜市	柳津町	×	1972/3/31
岐阜	羽島市	羽島市	×	1964/10/1
岐阜	各務原市	各務原市	×	1987/3/31
岐阜	各務原市	川島町	×	1982/5/30
岐阜	山県市	高富町	×	1980/4/15
岐阜	山県市	美山町	×	1973/3/30
岐阜	山県市	伊自良村	×	1973/7/28
岐阜	瑞穂市	穂積町	×	1979/10/31
岐阜	瑞穂市	巣南町	×	1978/8/10
岐阜	本巣市	本巣町	×	1975/3/31
岐阜	本巣市	真正町	×	1975/10/31
岐阜	本巣市	糸貫町	×	1982/3/31
岐阜	本巣市	根尾村	×	1980/8/31
岐阜	笠松町	笠松町	×	1956/12/5
岐阜	岐南町	岐南町	×	1980/1/25
岐阜	北方町	北方町	×	1973/3/31
西濃	大垣市	大垣市	×	2014/3/31
西濃	大垣市	上石津町	×	1979/5/31
西濃	大垣市	墨俣町	×	1956/6/10
西濃	海津市	海津町	×	1983/3/30
西濃	海津市	平田町	×	1984/3/31
西濃	海津市	南濃町	×	1982/8/1
西濃	養老町	養老町	×	1978/3/*
西濃	関ヶ原町	関ヶ原町	×	1993/1/1
西濃	垂井町	垂井町	○	1969/11/23
西濃	輪之内町	輪之内町	×	1988/3/1
西濃	神戸町	神戸町	×	1969/8/27
西濃	安八町	安八町	×	1975/10/1
西濃	揖斐川町	揖斐川町	◎	1971/9/1
西濃	揖斐川町	谷汲村	○	1977/7/1
西濃	揖斐川町	春日村	×	1983/1/25
西濃	揖斐川町	久瀬村	×	1973/3/30
西濃	揖斐川町	藤橋村	×	1982/11/6
西濃	揖斐川町	坂内町	×	2004/8/3
西濃	揖斐川町	徳山村	×	1976/11/10
西濃	池田町	池田町	×	1974/3/31
西濃	大野町	大野町	×	2010/2/28

付表 2. 本研究で調査した市町村史（中濃・東濃地方）.

圏域	現市町村	旧市町村	カワウソの記述	発行年月日
中濃	関市	関市	×	1967/11/15
中濃	関市	洞戸村	×	1926/5/15
中濃	関市	板取村	×	1982/5/*
中濃	関市	武芸川町	×	1979/12/1
中濃	関市	武儀町	×	1992/3/30
中濃	関市	上之保村	×	2000/10/12
中濃	美濃市	美濃市	×	1980/7/20
中濃	美濃加茂市	美濃加茂市	×	1980/1/15
中濃	可児市	可児市	◎	2007/3/30
中濃	可児市	兼山町	×	1972/11/1
中濃	郡上市	八幡町	×	1960/8/15
中濃	郡上市	白鳥町	◎	1976/3/20
中濃	郡上市	高鷲村	×	1960/10/1
中濃	郡上市	美並村	×	1987/5/*
中濃	郡上市	明宝村	◎	1993/3/31
中濃	郡上市	和良村	×	1988/12/20
中濃	郡上市	大和町	×	1984/9/15
中濃	富加町	富加町	×	1980/4/25
中濃	東白川村	東白川村	×	1982/3/25
中濃	七宗町	七宗町	◎	1993/7/31
中濃	八百津町	八百津町	×	1976/10/1
中濃	坂祝町	坂祝町	×	2002/3/*
中濃	白川町	白川町	×	1968/3/30
中濃	川辺町	川辺町	×	1996/2/1
中濃	御嵩町	御嵩町	×	2006/5/31
東濃	多治見市	多治見市	×	1980/8/1
東濃	多治見市	笠原町	×	1993/12/1
東濃	中津川市	中津川市	×	2012/2/10
東濃	中津川市	坂下町	×	1963/11/3
東濃	中津川市	川上村	×	1983/11/1
東濃	中津川市	加子母村	◎	1972/4/17
東濃	中津川市	付知町	◎	1974/4/20
東濃	中津川市	福岡町	◎	1981/3/20
東濃	中津川市	蛭川村	×	1974/3/25
東濃	中津川市	長野県山口村	×	1995/3/30
東濃	瑞浪市	瑞浪市	×	1974/3/1
東濃	恵那市	恵那市	×	1993/1/25
東濃	恵那市	岩村町	×	1961/2/1
東濃	恵那市	山岡町	×	1978/9/30
東濃	恵那市	明智町	×	1960/3/30
東濃	恵那市	串原村	×	1968/10/23
東濃	恵那市	上矢作町	×	2008/3/20
東濃	土岐市	土岐市	×	1970/3/25

付表 3. 本研究で調査した市町村史（飛騨地方）.

圏域	現市町村	旧市町村	カワウソの記述	発行年月日
飛騨	高山市	高山市	×	1982/3/31
飛騨	高山市	丹生川村	×	1962/1/30
飛騨	高山市	清見村	◎	1976/8/30
飛騨	高山市	荘川村	○	1996/2/8
飛騨	高山市	宮村	○	2004/12/20
飛騨	高山市	久々野町	◎	2010/3/*
飛騨	高山市	朝日村	○	1956/2/1
飛騨	高山市	高根村	×	1984/3/31
飛騨	高山市	国府町	×	1959/9/30
飛騨	高山市	上宝村	×	2005/1/31
飛騨	高山市	大八賀村	◎	1971/11/8
飛騨	飛騨市	古川町	×	1982/9/20
飛騨	飛騨市	河合村	×	1983/10/1
飛騨	飛騨市	宮川村	◎	1981/11/20
飛騨	飛騨市	神岡町	×	2007/3/*
飛騨	下呂市	萩原町	○	1962/11/3
飛騨	下呂市	小坂町	×	1965/12/10
飛騨	下呂市	下呂町	○	1954/10/1
飛騨	下呂市	金山町	○	1975/11/7
飛騨	下呂市	上原村	×	1972/11/3
飛騨	下呂市	馬瀬村	×	1961/2/*
飛騨	白川村	白川村	×	1998/3/31